

アウグスティヌスとルター（義認論を中心に）

鈴木 浩

本日は、「義認」という主題を中心に、アウグスティヌスとルターを取り上げたいと思います。この後には、やはり「義認」というテーマをめぐって「ルターとエキュメニズム」という題で江藤先生がお話をしてくださいますが、江藤先生が「ルターと現代」という線で話をされるのに対して、わたしの場合には、「ルターと初代教会」という線でお話をする、ということになります。ルターは十六世紀のドイツの人ですが、アウグスティヌスは四世紀の終わりから五世紀半ばまで活躍し、四三〇年八月二十八日に死亡したアフリカの神学者でした。古代人としては大変に長生きで、ほぼ七十六歳でした。

「アウグスティヌスとルター」という主題には必然性があります。ルターは二重の意味で「アウグスティヌス主義者」と呼ぶことができるからです。二重の意味というのは、形式的にも実質的にも、という意味です。まず「形式的」なことで言いますと、ルターは修道士になりました。ルターの伝記を読みますと、どんなものでも、ルターの修道院行きをルターの生涯における非常に重要な段階と見ています。当然のことです。入った修道院はアウグスティヌス会という名前の修道会に属す修道院でした。ですから、ルターはアウグスティヌス会

修道士であった、というまずその意味でアウグスティヌス主義者であった、ということになります。

しかし、それよりもはるかに重要なことですが、ルターはアウグスティヌスを深く学び、アウグスティヌスをよく理解し、アウグスティヌスの神学を発展させたという意味でもアウグスティヌス主義者でした。何よりも、十六世紀の宗教改革は厳密な意味でアウグスティヌスの神学という前提の中で初めて成立した現象でした。宗教改革には非常に多面的な意味あいがあつて、一言で定義することはできないのですが、神学の歴史という側面からいいますと、アウグスティヌス主義の内部に隠されていた矛盾が非常に激しい形で表面化した現象であつた、ということが出来ます。その証拠に、アウグスティヌスの神学の影響をまったく受けずに発展してきていた東方教会には、「宗教改革」という歴史的現象は生じませんでした。東方教会にも、その長い歴史の中で、さまざまな発展や変革、あるいは、改革運動というようなものは無論あつたのですが、西方教会で起こつた十六世紀の宗教改革に匹敵するようなものは、ついにありませんでした。アウグスティヌスに相当する人物が東方にはいなかったからです。

東方教会、つまり、ギリシャ語を使つていた教会と、西方教会、つまり、ラテン語を使った教会との決定的分岐点は、アウグスティヌスでした。西方教会はアウグスティヌスの圧倒的な影響下にその教理を発展させたのに対して、東方教会は実質的にアウグスティヌスとは無関係にその教理を発展させたのです。宗教改革が西方教会では起こつたのに、東方教会で起こらなかった教理的背景は、そこにありました。

さて、ルターの宗教改革の教理的特徴は、義認論が中心になつて論争が行なわれた、という点にあります。義認論、つまり、「信仰によつて義とされる」という教えは、勿論、聖書に根拠があるわけですが、とりわけ、ルターが強調した教えでした。ルーテル教会もその伝統を受け継いで、義認論を非常に重んじてきたわけです。

「信仰義認論」は、「行為義認論」に対立する教えです。「よき業によって義とされる」という教えに対抗して、「信仰によって義とされる」と教えるのが、信仰義認論です。パウロがローマ書やガラテヤ書で強調している教えです。ルターはこのパウロの教えを受け継いだのです。

信仰義認論は、罪人の救いに関わる教理です。救いに関わる教理を総称して「救済論」と言いますが、義認論は救済論に属す教理です。義認論は、救いの内容を「神の恵みによる無代価の罪の赦し」と理解する教えです。しかし、救済論は義認論だけではありません。救済論とはキリストによる救いをどう理解するのか、という点を解明するわけですが、例えば、東方教会の救いの理解は、義認よりも、聖化、つまり、罪人が神の恵みによって聖なる者とされるという点に強調を置きます。しかし、東方教会は伝統的に、「聖化」という言葉ではなく、「神化」、つまり、「人間が神になる」という言い方をします。初めてこの言葉を聞かれた方も多いと思いますが、ものすごい言い方です。東方教会は、神が人間となった出来事であるクリスマスを言い表わすのに、「人間が神となることができるために、神が人間とられた」という言い方をします。この問題を話すと長くなりますので、ここで止めますが、同じ救いの理解を取り上げても、東方と西方とは、このような強調点の違いがあります。東方は「神化」に強調があり、西方では「罪の赦し」を強調したのです。

さて、救いを罪の赦しと受け取るのは、西方教会の特徴ですが、恵みによって、信仰によって、キリストのゆえに、罪人の罪が赦される。これが信仰義認論の強調点であります。この信仰義認論は、まずパウロによって、次いでアウグスティヌスによって唱えられた教理です。そして、ルターがそれを強く打ち出すことになります。カルヴァンをはじめ、ルターの後を継いで改革運動を指導した神学者たちも、こぞってこの信仰義認論を強調しました。

無論、中世のカトリック教会が義認論を唱えなかったということではありません。西方教会は先ほども言いましたように、東方教会と比較しますと、「アウグステイヌス教会」と呼んでいいほど、アウグステイヌスの影響を強く受けてきました。ですから、中世の西方教会における教理の発展を称して、ある歴史家は、「アウグステイヌスへの一連の脚注」と呼びました。つまり、アウグステイヌスが書いた本文に、注釈を施したのが、千年に及ぶ中世の教会の神学者たちの仕事であつた、ということです。これは、確かにその通りだと思います。そして、アウグステイヌスはパウロ以来の義認論の神学者ですから、中世のカトリック教会も当然のことながら、義認論を知っていましたし、大切な教理であるという認識も持っていたわけであります。

ところが、宗教改革は教理的には義認論をめぐる論争だったわけですが、問題点はカトリック教会が義認論を「数ある教会の教えの一部」であるとして理解したのと違って、改革者たちは、義認論を教会のすべての教理や習慣を判定する基準と見做したのです。教会の様々な教理、あるいは様々な習慣を義認論に照らして再評価する、それが、ルターが、そしてルター以後のプロテスタント改革者たちが、行なったことだったので。義認論は、それによって教会が立ちもし倒れもする教理だと考えられたのです。わたしは、義認論を中核とするルターの神学を、いささかの強調を込めて、「義認論による一点突破全面展開の神学」と呼んでいます。義認論が教会の教理全体を再評価する際の判定基準になったのです。カトリックはそれを認めることができませんでしたから、ルターとそこで対決することになったのです。

ルターはその意味で義認論を強化したわけですが、それには重大な前提がありました。ルターというとすぐに「義認論」ということになりますが、アウグステイヌスと結びつく教理は、「義認論」もさることながら、「予定論」と「原罪論」ということになります。そちらの方が有名なのです。

予定論というと、すぐにカルヴァンということになります。カルヴァンはアウグスティヌスが初めて明確化した予定論を強化しました。ルターはアウグスティヌスが初めて明確化した原罪論を強化しました。しかし、カルヴァンを予定論の神学者と呼んでも、ルターを原罪論の神学者とは普通は呼ばないのです。ルターは義認論の神学者と呼ぶのが普通です。

先ほど、ルターは義認論を強化したけれども、それには重大な前提があると申しましたが、それは、義認論の強化には、原罪論の強化という前提があった、という意味であります。

予定論も、それから原罪論も、アウグスティヌスと結び付けられる教理です。アウグスティヌスが初めて明確化し、体系化した教理だったからであります。そして、アウグスティヌス以来、宗教改革までの千年、カトリック教会はこの二つの教理を大きな重荷だと感じ続けてきました。なぜかという、予定論も原罪論も、あの種の運命論だったからであります。予定論と原罪論は、アウグスティヌスの神学の中で最も大きな問題と矛盾をはらんだ教理だったのです。そして、宗教改革を代表する二人の神学者、ルターとカルヴァンは、こともあろうに、まさにその問題の教理、原罪論と予定論とを、教会の歴史が始まって以来初めてといっていいほど断固たる姿勢で主張したのです。冒頭で、宗教改革はアウグスティヌスの神学という前提があつて初めて成立した現象だと申し上げたのは、そういうことであります。

予定論というのは、天地の創造に先立って、神はある人を救いへと定め、ある人を滅びへと定めた、という教えです。ですから、人間の側には自由はないのです。神が定めた通りにこの世は動いていくし、人間も、予めその運命が定められている、ということです。ですから、これは宇宙規模の運命論ということになります。他方、原罪論は、人間は生まれながら罪人で、生まれてからも罪を重ねることしかできない、という教えです。ルー

テル教会の式文の「さんげ」には、「わたしたちは生まれながら罪深く、汚れに満ち、思いと言葉と行いによって多くの罪を犯しました」とありますが、それが原罪論です。私たちは礼拝の度ごとにアウグスティヌスの原罪論に基づく「さんげ」の言葉を唱えているのです。アウグスティヌスは、人間は罪を犯さざるをえないとか、罪を犯す苛酷な必然性のもとに置かれている、と言いました。その理由は、最初の両親、アダムとエバが罪を犯したので、その罪の結果として罪深い本性が、遺伝によって次々に受け継がれるからだ、ということです。生物学的運命論とも言えるでしょう。

予定論は割愛して、原罪論をもう少し見てみたいと思います。アウグスティヌスは、人間は罪を犯さないわけにはいかないと、罪を犯す必然性というように言い方をしたのですが、つまり、人間には罪を犯さない自由はない、と言っているのですが、そう言いながらも、人間には自由意志があるのだ、と言い続けました。つまり、運命論すれすれのところで踏み止まって、決定的運命論に踏み込まなかったのです。その結果、アウグスティヌスの発言はかんじんなところで、常に曖昧さが付きまといました。彼は、人間の自由意志は、進んで悪を選択することができると自由であるが、善を選択するほどには自由ではない、という際どい言い方をしたのです。もし人間が強制されて悪を行うのなら、つまり罪を犯すなら、強制されてですから、そこには自由意志はまったくないことになりますし、その結果、悪の責任は問われないことになります。自分の意志で悪を選択したのではないからです。ですから、アウグスティヌスは人間は自由に悪を選択する、その程度の自由意志は持っている、と断定します。ところが、その自由意志は、善を選択するほどには自由ではないのですから、人間の選択は常に悪を選ぶということになります。

しかし、これでは本当の自由意志とは言えないでしょう。自由意志はあるが、その自由意志には悪を選択す

る自由しかない、というのですから、ほとんど「詭弁」です。つまり、アウグスティヌスは名目的には自由意志を肯定しているのに、実質的には自由意志を否定しているのです。この曖昧さが、もつとはっきり言えば、この矛盾が中世カトリック教会を千年間縛り付けていたのです。

もう一度言いますと、人間は悪を選択する自由は持っているが、その自由意志は善を選択することができるほどには自由ではない、それがアウグスティヌスの主張だったのです。こういう主張に対して、無論、大きな反論が起きました。まず、ペラギウス派というグループが、それは運命論だといって反対しました。しかし、アフリカの教会はカルタゴで繰り返し会議を開いて、アウグスティヌスの立場を支持し、ペラギウス派を異端としました。ローマの教会もその決定を支持します。ついで、アウグスティヌスを支持するグループの中にも、アウグスティヌスの主張は極端であるとして、批判するグループが生まれました。セミ・ペラギウス派と呼ばれるようになったグループです。正統派の内部に入りますが、アウグスティヌスの主張は過激であるとしたのです。他方、東方教会は、アウグスティヌスの原罪論に全面的に反対しました。アウグスティヌスの生前から東方教会は原罪論を異端的な教えだと決めつけました。今日でもそれは同じです。運命論だということです。

西方教会の内部では論争が百年続き、五二九年、南フランスのオランジュという町で教会会議が開かれて論争を決着させます。この会議で西方教会は、穏健なアウグスティヌス主義を選択します。つまり、アウグスティヌスの危険な発言に封印をしたのです。アウグスティヌスの名前は出て来ませんが、過激な形の予定論、つまり、二重予定論という形での予定論は公式に断罪されます。原罪論については、アウグスティヌスが主張するままに受け入れられますが、西方教会はおそらくは無意識的だったと思います。その後、原罪論を実質的には骨抜きにしていきます。

ルターは骨抜きにされていたその原罪論を復活させ、強化します。アウグスティヌスは、名目的には自由意志を擁護したのですが、実質的には自由意志を否定するという際どい線で原罪論をまとめました。ですから、その後の教会は、名目的な自由意志の擁護という線に沿って、実質的な自由意志の否定を否定する、つまり、名目的にも実質的にも自由意志を認める方向で、原罪論の骨抜きにかかります。ルターは、逆に、実質的な自由意志の否定の線に沿って、名目的にも自由意志を否定します。つまり、全面的に自由意志を否定したのです。

一五二五年に書かれた有名な著作である『奴隸意志論』の中で、ルターは「自由意志はまっかな嘘である」と断定します。この著作は、前の年にエラスムスという大学者が書いた『自由意志論』という著作に比べて書かれたものでした。エラスムスは、アウグスティヌスの名目的肯定・実質的否定という曖昧さを、名実共に自由意志を肯定するという形で解消し、ルターは逆に、それを名実共に否定するという形で解消したのです。ルターの主張は非常に過激です。自由意志を名実共に否定しますから、当然のことに、すべてのことは何であれ、必然性によって起こる、という主張をします。

ルターはなぜ、このような過激な主張をしたのでしょうか。なぜ、『奴隸意志』というような激しいタイトルを付けた本を出版したのでしょうか。この本のタイトルを見たときには、ルターの敵だけでなく、ルターの友人や支持者でさえ、戸惑ったのです。それは「言い過ぎではないか」と思ったのです。しかし、ルターからすれば、言い過ぎでも何でもなかったのです。宗教改革の発端となったあの有名な『九十五ヶ条の提題』が書かれたのと同じ一五一七年に、ルターは『スコラ神学反駁』という書物を書いています。その書き出しはこうなっていました。「異端者に反対してアウグスティヌスが語っているときには、彼の発言には誇張があると語ることは、アウグスティヌスがどこでも嘘を付いている、と語るのと同じである」。分かり易いように言い替えますと、

「アウグスティヌスの原罪論には誇張があると語れることは、アウグスティヌスの語っていることは全部嘘だ、というのと同じだ」ということになります。アウグスティヌスが、人間は「罪を犯さないことはできない」とか人間は「罪を犯す苛酷な必然性のもとに立っている」と語っているとき、そこには誇張もはったりもなく、文字通りそのまま受け取らねばならない、とルターは主張したのです。

しかし、ルターはアウグスティヌスが原罪論を主張する際に、口が裂けても言えなかったことを、まるで何事もないかのように、あっさりと言ってしまいます。それが、「自由意志は真つ赤な嘘だ」という自由意志の全面的否定です。その際に、ルターはある人々が「パラダイム転換」と呼んだ「視点の根本的転換」を行っていました。それを説明するのにルターは「馬車」をたとえに使っていますが、今日では馬車ではなく、自動車にした方が分かり易いでしょう。

アウグスティヌス以来、人間は自動車を運転する運転手のように考えられていました。ハンドルを握って車を運転するのが人間です。すると、神の戒めは「道路交通法」ということになります。人間は「安全運転」をしなければなりません。交通規則を守って安全に目的地まで運転するのが、人間の一生なのです。その際に、自動車は無料で与えられ、故障も無料で修理され、ガソリンも同じように無料です。それが「神の恵み」なのです。故障を修理するのが、教会のサクラメントです。しかし、運転するのは、人間です。神の恵みを受けて、人間は安全運転をしなければなりません。しかし、こんなに車を運転する人は、誰もが駐車違反のようないくつな小さな違反を繰り返しているように、罪を犯すのは避けられないのです。駐車違反を厳密に取り締まれば、大都市はパニックに陥ってしまいます。ですから、時には町のお巡りさんが駐車違反に理解を示すように、教会も、人間が日毎に犯さざるをえない小さな罪には寛容なのです。しかし、酔っぱらい運転は困ります。スピー

ド違反も度を超えれば、非常に危険です。カトリック教会は罪を区分して、死に至る「大罪」と、それほどではない「小罪」とに区別しました。

道路交通法でも、小さな違反は「反則切符」で処理して、それで終わりです。しかし、酔っぱらい運転による人身事故を起こせば、そういうわけにはいきません。中世後期にも、教会は「反則切符」を発行しました。いわゆる「免罪符」です。「切符で処理する」という点では、昔も今も同じです。

言いたいことは、ルターまでは、車の運転手というモデルで人間のことを見ていた、というこの点です。ところが、ルターは、おそらくは教会の歴史が始まって以来初めて、その比喻をひっくり返して、人間は運転手ではなく、実は自動車の方だと言ったのです。「パラダイム転換」つまり「モデルの転換」です。それまでは、人間は運転手でしたから、問題は「安全運転」でした。ところが、ルターによるこの転換によって、事態は一変します。人間が自動車であるとすれば、問題は「それを誰が運転するか」です。サタンが運転するのか、それともキリストが運転するのかです。サタンが運転しているのであれば、いかに安全運転をし、信号も守り、スピード違反をしなくても、行き先は地獄しかないのです。車はサタンの意志に従って目的地を目指しているからです。他方、もしキリストが運転してくれるなら、どれだけたがた道を走り、危険な道を走っていても、目的地は天国でしかないのです。

義認とは、キリストが運転席からサタンを突き落とし、キリストがハンドルを握ってください、そういうことだとルターは言うのです。キリストが運転席に座ってくれば、もう安心、どんながたがた道を走っても、恐れることはないのです。これが、ルターが『奴隸意志論』の中で、エラスムスの『自由意志論』に反対して語っているメインポイントです。

ルターのものすごさは、まさにここにあります。ルターが「自由意志は真つ赤な嘘だ」と言ったときに言いたかったのは、自分が運転手だと思っている限り、罪の恐ろしさ、サタンの恐ろしさは、まだ十分には分かっていない、という点にありました。そんな呑気なことではないのだ、人間は悲しいことにサタンが運転している自動車なのだ、それが、アウグスティヌスの原罪論を強化したルターの原罪論の根本的立場です。「自由意志は真つ赤な嘘だ」というのは、「人間は運転手ではなく、サタンに運転されている自動車だ」という意味なのです。しかし、とルターは言います。もし、運転席からサタンが追い払われ、キリストがハンドルを握ってくれとしたり、いったいどうなるのだろう。もし、キリストがわたしという自動車を運転してくれているのなら、もう恐れることなどは何もないのです。ですから、ルターは「悪魔世に満ちて、よし脅すとも、神の真理こそ、わが内にあれ。陰府の長よ、吠え猛りて迫り来とも、主の裁きは汝が上にあり」と確信に満ちて歌うのです。これが、アウグスティヌスの義認論を「パラダイム転換」つまり「モデルの転換」という離れ業で突破したルターの義認論なのです。その背景には、アウグスティヌスがどうしても踏み越えることのできなかった地点、つまり、名目的には自由意志を肯定し、実質的にはそれを否定するという際どい地点を、あたかも何事もないかのようにして踏み越え、「自由意志は真つ赤な嘘だ」と言い切ったあの強化された原罪論がありました。内容に即して言えば、このように、原罪論と義認論は一体のものなのです。

さて、人間は車を運転する運転手ではなく、キリストによって運転されている自動車だという「パラダイム転換」によって、鮮やかな姿で再登場したルターの義認論は、そのことでアウグスティヌスの義認論を逆立ちさせました。ここでも転換が起こっているのです。

アウグスティヌスの義認論は、義認論そのものとしてはカルヴァンに受け継がれていきます。そして、義認

論という呼び方は失われ、聖化論と呼ばれるようになります。「義認と聖化」と言われるときのあの「聖化」です。カール・バルトは、ルターが「義認論の神学者」であるとすれば、カルヴァンはすぐれて「聖化論の神学者」であつたと指摘しています。アウグステイヌスが語っているときには「義認」と呼ばれているその同じ事態が、カルヴァンが語るとなぜ「聖化」と呼ばれるのか、ここでもルターの「パラダイム転換」による、義認論の逆転が起こったからです。

アウグステイヌスは義認、ラテン語では *justificatio* と言いますが、義認を、人間が神の恵みによって生涯追求する課題だと理解しました。人間が義とされるのは、人間の生涯のはるか彼方の地点です。義認の理解は多分に「量的」で「段階的」です。人間は全面的に神の恵みに依存しつつ、徐々に義人である度合いを強め、それに反比例して罪人である度合いを薄めて、ついに救いの完成へと至るのです、つまり、義認の完成です。今日では、それは「聖化」と呼ばれているプロセスです。しかし、アウグステイヌスがそれを義認と呼んだのは、無論、間違いではないのです。義認、*justificatio* という言葉は *justus* (義人) という言葉と *facio* (作る) という言葉の合成語で、「義人を作り上げる」という意味だからです。アウグステイヌスでは、義認は、人間の生涯の果てに最終的に完成します。

ところが、ルターはそれを逆転させてしまいます。人間が神の言葉に出会い、キリストを信じたその瞬間に、断固として義認が成立します。それがキリストの救いの業が持つ絶大な力なのです。無論、ルターはアウグステイヌスのような響きをさせて義認について語ることもないわけではないのですが、圧倒的な響きは、キリストがわたしの罪をその身に引き受け、キリストが御自身の義をわたしに被せてくれるその瞬間に、罪人であるわたしは義とされているのです。ですから、出発点で義とされた信仰者は、義とされた者としてその生涯を始

めるのです。アウグスティヌスでは、信仰者は義人を目指して生涯を始め、義人となって生涯を終えます。ルターでは、信仰者は義人として生涯を始め、義人として生涯を歩み、義人として御国に凱旋します。なぜなら、ルターの比喩を使えば、キリストはわたしという自動車のハンドルを持って御国へと導いてくれる運転手だからです。

罪人がキリストと出会い、キリストを信じたその瞬間に、罪人はもはや罪人ではなく、キリストによって義とされた義人なのです。そして、そのすべてが神の恵みによって引き起こされるのです。罪人はキリストの義に圧倒され、キリストの義の大海原の中に投げ入れられ、そこで溺れ死に、義人としてキリストと共に立ち上がるのです。それが、ルターの義認論の圧倒的迫力です。ルター以前にも、ルター以後にも、信仰による義認をルターほどに力強く語ることできた人はいませんでした。なぜかと言うと、ルターほどに人間の罪を深く認識した人はいなかったからです。義認論の力強さは、罪認識の深さに正確に比例します。それは、パウロが発見し、ルターが再発見した法則です。もう一度言いますが、「義認論の力強さは罪認識の深さに正確に比例する」。これは、教会の歴史を通じて変わることのなかった真理です。そして、教会の歴史を通じて、かつてなかったほどに罪の認識が欠如している現在、またも見事に証明されている真理です。「罪認識の欠如の度合いに正確に比例して、義認論はその力強さを失う」。これが先ほどの法則を裏返して言った法則です。少し前に、内容に即して言えば、原罪論と義認論とは一体であると指摘しましたが、それはこういうことだったのです。

ルターの義認論は、しかし、かつてなかったほど強くキリスト論と結び付いた義認論でした。義認が起る場は、つまり、救いの出来事が生じる場は、キリストの義という大海原なのです。わたしの罪がどれだけ大きくても、あるいは、サタンの力がどれだけ大きくても、だから、わたしの罪がわたしをどれだけ脅かし、サタ

ンがわたしにどれだけ恐怖を与えても、キリストの義は、大津波のようにそれを覆ってしまふ、というのです。ルターの義認論は、アウグスティヌス以来、中世の人々の心を深いところで脅かしていた病理を魂の奥底で深く癒した義認論でした。中世の人間が抱えていた最大の宗教的問題は、救いの確かさを得ることができない、というこの点にありました。宗教的不安、それが中世の人を脅かしていた病理であり、ルターはそれを他の誰よりも強く感じていたのです。アウグスティヌスの義認論も、アウグスティヌスの教会論も、アウグスティヌスの予定論も、救いの確かさを与えませんでした。すべては終末へと先送りされていたからです。

ルターはあのパラダイム転換によって、救いの確かさを鮮やかに提示できたのです。アウグスティヌスの義認論を逆転させ、信仰者はすでに義とされた者として、言い替えれば、すでに救われた者として、この世を歩むのです。力点は「すでに」というところにあります。しかも、自動車の比喻を使えば、キリストがすでに運転手なのですから、どんなでこぼこ道でも、どんな迷路でも、つまり、わたしがどれだけ動揺し、どれだけ怯えても、キリストが運転してくださっているという事実を決して動かないのですから、わたしの救いは決して揺るがないのです。ルターの義認論は、わたしというこのぼろ車は長い長いでこぼこ道を走破できるのだからという問いを最初から放棄し、キリストがわたしのハンドルを握ってくださるというその一点に集中的関心を寄せる義認論です。

その結果、心理学的に言えば、ルターの義認論は、宗教的不安という中世の病理を根本的に癒したのです。力点は「根本的に」というところにあります。少し極端な言い方をすれば、教会はパウロ以来初めて、魂の奥底にまで響く福音をルターの義認論を通してはつきりと聞いたのです。そして宗教的不安という病理は、ルター自身がそうだったように、深い癒しを与えられたのです。

だから、当時の人々はあれだけ素早く、あれだけ敏感に、それに反応したのです。

ルターの義認論は、パウロが語っていたことを十六世紀のヨーロッパの状況に向けて語り直したものでした。ルーテル教会の今日的責任は、ルターが語っていたことを世紀末から二十一世紀の状況に向けて語り直すことだと言えるでしょう。

（本稿は一九九八年十月十二日に行われた「ルター研究所秋の講演会」の講演原稿をそのまま掲載した。研究所の所員となって初めて行った講演だったので、今から見れば手を入れたいという思いもあるが、歴史神学を専門にする者として、あの時点での講演をそのまま残すことにもそれなりの意味があると考えたからである。）